

## 【石の俗称】

# みちのく石便り(その5)

加藤 碩 一<sup>1)</sup>

再び宮城県に戻ってきて、あれやこれやの石巡礼を続けましょう(第1図)。私事ですが、わずか2年弱の滞在で仙台・宮城が第4の故郷のような気がしてきました(ついでにいいますと、第1の故郷は生まれ育った神奈川県横浜で、第2の故郷は結婚後住み着いている東京で、第3は学生時代から30年以上も野外調査の対象となってきた信州です)。御用とお急ぎでない方はしばしお付き合いのほどを。

### 1. 仙台出身の大横綱「谷風」にまつわる石

近頃の相撲は、独断と偏見ですがなんとなく面白みに欠けてきた気がします。魅力のある力士が乏しいせいでしょうか。それはともかく、古今無双

の大横綱といえば江戸時代の谷風でしょう。仙台出身の彼にまつわる石が当然(かどうか知りませんが)仙台にあります。仙台駅からほど遠からぬ南東方の若林区木ノ下2丁目(訪れる方は仙台駅前バス停⑤乗り場より大和町行き薬師堂下車)にある陸奥国分寺に谷風縁の石が2つもあるのです。この寺は天平十三年(741)春、第45代聖武天皇(701~756)の勅願により建立された日本最北の地にある国分寺です。『続日本記』によれば、厚く仏教を信心した聖武天皇は奈良に東大寺、全国60余の国毎に僧寺と尼寺の2か寺を置き、一方の僧寺を金光明四天王護国の寺、もう一方の尼寺を法華滅罪の寺として、国家安穏・疾疫消除を願い、『金光明最勝王経』『妙法蓮華経』等を転読させたとされています。

寺の開基は奈良時代の名僧で、諸国を回って仏教普及と衆生救済に努め、日本最初の大僧正の位を受けた行基(668~749)です。創建当時は「寺の華」と讃えられて七重塔が高くそびえ、七堂伽藍・三百坊を数える大寺院であったと伝えられています。しかし、七重塔は承平四年(934)、落雷のために焼失し、七堂伽藍・三百坊は文治五年(1189)8月、源頼朝の藤原氏追討の兵火によりことごとく焼失してしまいました。その後、伊達政宗により、慶長十年(1605)から3か年を費やして、現在の金堂(薬師堂)・仁王門・鐘楼等が造営されましたが、他は礎石が残るのみです(写真1)。薬師堂は桃山様式の単層入母屋造り、本瓦葺きの仙台最古の建造物で、国指定(昭和36年4月15日)の重要文化財です。現在では、2月に行われる柴灯大護摩、いわゆる火渡りの祭典で有名です。筆者も見に行きまし



第1図 位置図(図中の番号は本文中の節の番号と一致)。

1) 産総研 東北センター

キーワード: 谷風牛石, 谷風踏み石, 母子石, 稲井石, 鳴子石, 虫喰岩, 二王岩, 小門岩, 八幡岩, 折石, トンネル岩, 矢止めの岩, 潮吹き岩



写真1 陸奥国分寺(仙台).



写真2 谷風牛石.

たが後生安楽を願う衆生は是非参加せよと山伏(姿)が呼びかけますが、参加するのは現世でも十二分に安楽そうな人ばかりです。人間の欲には限りがありませんが、人それぞれです。

さて、この陸奥国分寺に2つの石があります。1つは「谷風牛石」で、他は「谷風踏み石」です。江戸時代の寛延三年(1750)夏、毎夜丑の刻になると薬師堂にお参りして何ごとか一心に祈願をこめる一人の女性がいたそうです。立派な男の子が授かりますようにと、お薬師様に百日々参の願をかけていたのです。満願の夜に仁王門をくぐろうとすると、足元に大きな牛が長々と横たわっており、先に進むのを妨げていました。しかし、ここで戻っては満願もかなうまいと思い、勇を鼓して牛の背を乗り越えて薬師堂へお参りし、満願を果たしました。実はこの牛、仁王門の前にあった大石だったのですが、その女性の信仰心の篤さを試すため、お薬師様が姿を変えて現れたのだらうかともいわれています。やがて8月8日の朝、元気な男の子が誕生しました。これ



写真3 谷風銅像.

が後に「わしが国さで見せたいものは昔谷風、今伊達模様」と里謡にうたわれた寛政の名力士、谷風の誕生譚です。しかしこの種の話によくあるように異説も多々あります。願をかけたのは21日間で、母親が仁王門を通り過ぎるたびに石が盛り上がり、ついに牛になった(その後、また石塊になって今日に伝わっている)とか、谷風が5歳のときにこの牛石が邪魔なので、何度も力を入れてついに動かしてしまったとか言います。社務所で聞くと、2つに割れて片方は行方不明になったそうです。もちろん転石なので、由来はわかりませんが周囲に分布する新第三紀中新世のごく普通の輝石安山岩です(写真2)。

谷風は人格・力量ともにぬきんでた古今横綱の第一人者と評価されています。本名は金子与四郎といい、寛延三年(1750)8月8日に、現在の仙台市若林区霞ノ目屋敷に生まれました。匂当台公園に実物大のブロンズ製の立像があります(写真3)。まったく力士らしい体格と風貌です。彼は、伊勢ノ海部屋に所属し、明和六年(1769)4月初土俵で、四股名を「達ヶ関」といいました。当時は、実力の無い見栄えのよい大男を最高位の大関に据えて見世物的な客寄せを図り、これを「看板大関」と称しました。「達ヶ関」はこの看板大関でしたが、稽古も十分積み実力をあらわして安永五年(1776)10月場



写真4 谷風踏み石。

所には真の小結として谷風梶之助の四股名を襲名しました。寛政元年(1789)11月場所、小野川とともに横綱免許を受け、一人土俵入りをを行い、相撲人気を取り戻しました。身長189cm、体重169kgで、横綱時の勝率は96.1%、優勝回数21回という驚くべきものでした。寛政七年(1795)1月9日に44歳で流行性感冒のため35連勝を継続したまま現役で死亡しました。看板力士として登場してから実に26年にも及ぶ力士生活は驚異的なものです。いまだきの相撲取りとは格が違います。

さて、谷風は晴れの郷土入りをした際、自分の出世を見ずに世を去った母の墓前に詣で、薬師堂へもお礼参りをしました。そして亡き母が満願の日、牛に見たという大石を感慨深げに眺めつつ、「おかげで谷風は、このように力持ちになりました」と傍にあった石を右足で踏みつけたところ、足跡がへこんだといいます。さて、社務所の左側奥の敷地境界付近に石の蹲つばいがあります(写真4)。蹲は、前石の上につくばって(しゃがんで)使うものでこのように高さが低いものを言い、蹲手水鉢を略した言い方です。客が茶室に入る前に口をすすいだり手を洗うために置かれています。これに対して雪隠(トイレ)脇において手を洗うための丈の高い形ものは縁先手水鉢と言います。庭の点景物として据える場合、蹲の水鉢を中心に右前に湯桶石、左前に手燭石、全面に前石を置きますが、ここではそれらは失われており、たぶんどこからか移動させられたものでしょう。岩質



写真5 竹根石手水鉢(兼六園・金沢)。

は、「牛石」と同じ何の変哲もない輝石安山岩です。手水をためておく孔が上面に刻まれており、これが谷風の足型であるという説と側面のへこみが足跡だとする説があります。上面の孔は人工的にノミで刻まれたもので、側面のへこみはなんらかの侵食跡です。いずれにしてもお話を。野暮を言うのはこれくらいにしましょう。

またまた(いつものことですが)、脱線してみちのくとは何の関係もありませんが、地質屋には興味深いと思いますのでついでに珍しい手水鉢を紹介しておきましょう。ところは北陸の石川県金沢市の天下に名高い兼六園です。ここに「竹根石手水鉢」と称されるものがあります(写真5)。そばの説明板には「この手水鉢は竹の化石のように見えるが椰子類の茎と根の化石で極めて珍しい」とあります。化石としてはとまかく手水鉢に利用しているのは確かに珍しいですね(この節は、加藤(2004)に加筆してあります)。

## 2. 塩竈しおがまや ああ塩竈しおがまや 塩釜しおがまや

塩竈市は、宮城県のほぼ中央、仙台市の東北約16kmで仙台の海の玄関ともいうべき松島湾南西(塩竈湾)岸に位置します。人口約6万人余りにもかかわらず東北地方で最も人口密度の高い(3,513人/km<sup>2</sup>)港町で、後述する塩竈神社の門前町としても栄えてきました。

「藻塩焼く」といわれた製塩の地として平安時代の歌枕の1つとして知られており、塩を作る竈かまどを意味する「鹽竈」が本来の地名で、「鹽竈」の名は、神社の御神竈に由来します。その後、旧字体の「鹽」



写真6 母子石(塩竈).



写真7 母子石(中国).

が新字体の「塩」となって「塩竈」となりこれは今でも使われております。ここまではいいのですが、さらに「竈」を「釜」とすると、これは竈<sup>かまど</sup>の上にかけるお「釜」のことですから意味が違ってきてしまいます。近頃、いたずらに利便性のみ追い求める町名変更や町村合併によって由緒ある地名が消失していくのはおおげさに言えば文化の破壊にもつながることだと悲憤慷慨、切齒扼腕する筆者にとっては、同様にやたらな字体の変更は暴挙だと思っておりますが、「昭和も遠くなりにはける」年寄りの繰言かもしれません。ともあれ、塩竈市は、以前紹介した(また後述する)松島湾層群が分布しており、その模式地でもあります(加藤, 2003)。ここにも石の俗称のネタが文字通り転がっています。以下に紹介しましょう。

## 2.1 哀れなるかな「母子石」

JR東北本線塩釜駅下車南方へ徒歩約15分といったところの道端に、赤く塗られた鉄製の柵で囲われて、スレート製(これは稲井層の粘板岩でしょう)の石碑が建てられてあり、「母子石之碑」と刻まれています。その向かって右側に「母子石」が鎮座しています(写真6)。扁平な方状の岩塊で、縦75cm、横75cm、高さ15~20cmほどです。上面はゆるく凹凸しており、見ようによっては足跡状の凹みがありそうな無さそうな感じです。表面は著しく風化しており、たぶん新第三紀中新世前期の松島湾層群に属する安山岩か砂岩かと思いますが、眼鏡を忘れた老眼には安山岩か砂岩かの識別さえつきにくいあります。眼鏡やルーペを忘れること自体悲しいことにボケの証左ですが、この石には、次のよう

な悲しい謂れがあります。約1,200年前、国府多賀城建設時に人柱に選ばれた父を悲しみ、その妻と娘が傍らの石の上で飲まず食わずで泣き続けついに亡くなってしまったという言い伝えです。二人の立っていた石に足跡が残されたものが、「母子石」として今に伝わっているそうなのです。人柱に選ばれた理由というのにも一説があります。城造りを指揮した役人が土地の長者の娘を嫁に申し受けようとしたが、断られました。その後、人柱に長者が選ばれたのは、娘の自分が求婚を断ったためだと思い、娘は父親に嫁にやってくれと頼みます。しかし、人格者であった父親の長者は、それで自分が助かって誰か他の人が犠牲になるのだからといって従容として人柱になったそうです。為政者とはかくありたいものですが、なお、ついでに言いますと「塩釜石」というのは、塩釜産ではなく宮城県桃生郡鳴瀬町で採掘されている同層群の凝灰岩石材で、今では需要が減っていますが、かつては石蔵や石堀に多く利用されていたものです。

さらについでに言いますと(脱線ばかりですが)、中国にも各種の「母子石」が知られています。人造の巨大な石の彫刻だったり、自然石岩塊だったりしますが、あいにく中国語で紹介されているので詳細はわかりません。1つだけ小さいのを紹介しましょう。中国の作家である李漁村さんは、自称世界の奇石収集家だそうで3,000個に及ぶ蔵石を持ち、その1つに写真7に示すような「母子石」があるそうです。石質は写真からはわかりませんが、黒色の基岩と後から沈積した石英の白い部分があいまって、赤子を見つめる母親の上半身像が言われてみればそのように見えますね。



写真8 塩竈神社.

## 2.2 由緒正しい鹽竈(塩釜)神社と俗なる石

陸奥国一ノ宮であり陸奥国総社でもあるこの由緒ある神社は、JR東北本線塩釜駅の北約1.5km、またはJR仙石線本塩釜駅の西方約1kmに位置する海拔57mの通称「一森山」と称される丘陵上にあります。祀られている神様は3柱おられ、当地で製塩を教えたという鹽土老翁命しおつちのおきなのみことと彼が先導したという武甕槌命たけみかづちのみことと経津主命ふつぬしのみことですが、これは元禄六年(1693)に伊達藩四代藩主綱村公が編纂させた「鹽竈神社縁起」を出典とするもので、本来の祭神かどうか疑わしいとする説もあります。相当古い神社であるにもかかわらず、「延喜式」の「神名帳」記載の神社である「延喜式内社」のリストに掲載されていないのです。後世のでっちあげかもしれません。

この付近の地質は、「みちのく石便り(その1)」(加藤, 2003)でも紹介しましたが、新第三紀中新世前期の松島湾層群の下位から2番目の佐浦町層さうらまちそうの火山円礫岩・凝灰岩・凝灰質砂岩などからなり、垂炭の薄層を挟む陸成層でステゴロフォドン象の化石の産出が知られています。「奥の細道」によると、芭蕉は元禄二年(1689)5月9日、当地を訪れ、神社近傍の法連寺門前に投宿したそうです。今に残る法連寺跡地周辺は佐浦町層がよく露出しており、当時芭蕉も象の化石が眠るとも知らず佐浦町層の



写真9 なで牛(臥牛石).

凝灰岩を踏みしめてお参りしたのかなとしようもないオタクな感想を抱いてしまいます。

さて、表参道(写真8)には、立派な石鳥居がありますが、これは昭和三十四年(1959)に宮城県的重要文化財に指定されています。そこから続く石の階段は二百数十段もあり、一気に上ると息が切れます。年ですわね。この階段や石碑に使用されている石材が「稲井石」です。「井内石」「仙台石」「北上三色石」などとも呼ばれます。中生代三畳紀の稲井層群に属し、北上山地の三畳系分布域の過半を占める伊里前層の頁岩です。大型の石材が採石でき、とくに石巻地域で稼行されています。境内に入ると左手に「奥の細道」にも記述されている「文治の燈籠」が石柵に囲まれており、そのさらに左手に石製の「なで牛」があります(写真9)。他と同様何の変哲もない安山岩製の像ですが、愛嬌のある顔はほほえましいものです。こうした「臥牛石」は、すでにいくつか紹介しましたが(加藤・遠藤, 2002)、ここの石は、そばに立てられている説明板によれば、『なで牛は「商いは牛の涎」のことわざから牛の涎のように商いが細く長く続くことを祈願して大正四年四月に仙台市名掛町と一番丁の名一講員宮城貯蓄銀行はじめ二十名の連名で奉納したものです。牛はなでるとよく涎を出すことから商売繁盛・開運のなで牛です』とあります。筆者もなでてきました。きついつかは幸せが来ることでしょう。今後参詣する方は忘れずに。

## 3. 「街を歩けば下駄も鳴子」の鳴子峡

このしょうもないオヤジギャグ的なキャッチフレーズ(?)は筆者の創作ではありません(筆者がこ



写真10 鳴子水石の手水鉢.



写真11 鳴子峽.

んな駄洒落めいた物言いをせず、格調高く本文を書き綴っていることは読者がよくご存知の通りです)。これは、先日鳴子峽を再訪したおり街中のあちこちの幟やポスターに書かれていたものです。今年度の町おこしキャンペーンの一環として考えられたものでしょう。それにしてもなんとという……。さて、寺とか神社とか抹茶香くさい話題が続きましたので、気分を変えて温泉と石探訪に参りましょう。

宮城県北西部に位置する第四紀の鳴子火山は、直径400mの潟沼カルデラと、東側の4つの溶岩円頂丘、西側の修羅洞火口からなっています。標高470mで、基盤の高さが250mとなり、東北地方の陸上火山のうち、最も低い火山なのです。活動開始時期は約10万年前で、山体南東側に柳沢火砕流堆積物と称される軽石流が流下し、潟沼カルデラが形成されました。次に4つの溶岩円頂丘の形成、修羅洞火口からの溶岩流噴出が続きました。潟沼も引き続き爆裂火口として活動し、数度泥流の流出がありました。最新の活動産物として広範囲に降下火山灰層が分布しています。もちろん今ある温泉もこれら火山活動の賜物です。1,200年も昔に開湯したと言われ様々な泉質を示します。噴出物の岩質はSiO<sub>2</sub>の含有量が68~72%なので、デイサイトということになります(昔は石英安山岩といって

いました)。斑晶は主に普通輝石と紫蘇輝石で、まれに普通角閃石を含みます。といっても、まあ日本で普通に見られるものです。一般に「鳴子石」と称されています。鳴子駅から鳴子峽へ行く途中の道路際に「鳴子水石」の看板があり、「鳴子石」を蹲や蛙、石灯籠などに加工して売っています(写真10)。

さて、鳴子温泉の西方で大谷川が上記の火砕流堆積物を削り込み、全長2.5kmにわたる県指定名勝「鳴子峽」を形成しました。崖の比高は80m~100mありますが、幅はもっとも狭いところで10m、広いところでも100mほどで、急峻な形状を呈しています。遊歩道が整備されており、紅葉の時期には特に人気が高い手軽なハイキングコースです(写真11)。たくさんの石の俗称がありますが、もっとも有名なのは入り口からほど遠からぬところにある「猿の手掛け石」でしょう。写真12にあるように痩せ尾根状地形の岩塊の上部に浸食に弱い部分が削剥され、いくつかの穴が開いているものです。これを猿が手がかりにして急な斜面をよじ登ったというのでしょうか。誰か見た人がいるのでしょうか。ネーミングはいいのですが地質学的には意味はありません(本駄文と同じではないかという悪口は聞こえないふりをします)。このほかよくぞつけたね、どうしてこんな名前がついたのと言うような石が



写真12 猿の手掛石.



写真14 小門岩.



写真13 虫喰岩.



写真15 二王岩.

多々あります. いわく「立岩」「赤松岩」(たぶん岩の形には無関係で単に赤松が生えていただけなのでしょう), 「一双岩」「獅子岩」「羽衣岩」「天柱岩」「えくぼ岩」「帯岩」「虫喰岩」「九竜岩」「夫婦岩」「晴雨岩」「弁慶岩」「扉岩」「烏帽子岩」「福の神岩」

などなど枚挙にいとまがないほどです. こういった俗称はいわば観光用俗称なのできりがありません. いくつか写真を示すにとどめましょう(写真13・14・15). これらはいずれも凝灰角礫岩で, 上流に進むにつれ, すなわち下部から上部に行くにつれ



写真16 材木岩。

礫の量が減る傾向にあり、一部は泥流堆積物であることを示す浸食に弱い泥やシルトの大塊が含まれています。

#### 4. セケ宿の「材木岩」

2003年秋の東北センターのレクリエーションの一環としての日帰りバス旅行の帰途、宮城県南西端に位置する刈田郡セケ宿町を通りました。仙台からは南に約60km、JR東北本線白石駅から車で20分ほどの所です。昔は、奥州街道と羽州街道を結ぶ往還としてにぎわい、7つの宿場があったことに由来する町名です。特別に停車してもらって寄ったのはここに有名な「材木岩」があるからです(写真16)。高さ約65m、幅約100mにわたって露出している柱状節理の発達した岩壁です。その昔、ある飛弾の匠が当地で不動尊の建立を試みたそうですが、結局失敗してしまい、そのとき捨てた角材が岩となったものだという伝説がありますが、もちろん嘘です(と言っては身も蓋もありませんが)。地質学的には、柱状節理は、安山岩・玄武岩などの火山岩や半深成岩に発達する多角柱(四角形～六角形の断面が多い)状の節理で、岩体の冷却時の体積収縮によって冷却面に垂直に形成されたもので、



写真17 八幡岩。

冷却節理の一種でもあります。特段珍しいものでもなく全国各地にあります。このように壮大な情景を呈するのは少なく国指定の天然記念物としたのも故あります。

#### 5. 唐桑半島の奇観・奇岩

さて、陸中海岸に目を転じてみましょう。宮城県最東北端に位置し、気仙沼市に隣接して本吉郡唐桑町があります。その大部分を占める唐桑半島は、北西-南東方向に延び、長さ約20km、周囲約50kmで、リアス式の海岸を呈しています。昭和六年(1931)に陸中海岸国立公園に編入され、さらに、昭和四十六年(1971)に海中公園の指定を受けた景勝地です。康平五(1062)年9月、鎮守府將軍源頼義、義家親子率いる官軍は、出羽の豪族清原氏の援助を受け、奥六郡の長、阿倍貞任の拠点小松の柵、衣川の柵を攻撃しました。戦いに敗れた蝦夷軍団は陸奥の山野に退却し、一部はこの唐桑の地に逃れ隠棲したといいます。

中でも、「<sup>おおがま</sup>巨釜」～「<sup>はんぞう</sup>半造」間の約1kmほどの長さの遊歩道を歩いていると海岸沿いにいろいろな名称の石が現れます。「巨釜」は波がまるで煮えたぎっているように見えることや、沖の「八幡岩」(写真17)が蓋のようにも見えることから呼ばれているそうです。「半造」は、一帯の海産物資源が豊富で、アワビなどを採取して生活が繁盛したことから、なまって「半造」となったとか、釜が半分だけ作られたような形状から呼ぶのだとか言われています。

もっとも有名な「折石」は、高さ16m、直径4mの石柱状の岩塊で、明治二十九年(1896)の三陸大



写真18 折石.

津波で先端部が2mほど折れたといわれ、名前の由来になっています(写真18)。節理が発達しているので、これが弱所となって壊れたのでしょうか。岩質は古生代二疊紀の晶質石灰岩、いわゆる大理石ですが、黒～暗緑色のパッチが目立ちます。三陸地震はM8.5程度の海溝地震でしたが、震源の断層運動は比較的ゆっくりしたもので揺れはそれほど大きくはありませんでした。そのかわり海底の変形が大きく津波として成長し、おりからの満潮とあいまって多大な津波被害をもたらしたのです。死者は約22,000人といわれます。最大の波の高さは22mに達しました。津波は太平洋を横断しハワイで数m、サンフランシスコで20cmありました。この他にも三陸沿岸は津波被害の繰り返された地域です。例えば、JR石巻線女川駅の階段には、青い線でチリ地震津波の到達位置が示されています(写真19)。この地震は、昭和三十五年(1960)に南米チリ沖で発生したM8.5巨大地震です。この地震に起因する津波は太平洋を越えて、約一昼夜経て襲来しました。死者行方不明者は139人に達し、経済的損失も著しいものでした。

さて、他にもいろいろ石の俗称があります。「矢止めの岩」というのは、唐桑半島石浜沖合にある岩礁で、源義家が朝日に映えるこの岩めがけて「南無



写真19 JR女川駅階段に表示されているチリ地震津波到達域.



写真20 トネル岩.

八幡大菩薩」と唱えて矢を放つと、この岩場まで飛んだといういわれがあります。「トンネル岩」は、この岩の海面近くに海食による穴があいており、波の寄せ引きのたびにこの穴を海水が流れるというものです(写真20)。「潮吹き岩」は、各地にあります。折り重なるような岩と岩の間に侵入した海水が音とともに吹き上げるという雄大なものです。半島南端の御崎まで先がありますが歩き疲れたのでこの辺で今回はお開きにいたしましょう。

#### 参考文献

- 加藤碩一(2003):みちのく石便り(その1). 地質ニュース, no.588, 61-69.  
 加藤碩一(2004):所長エッセイその1 谷風と石. AIST Tohoku Newsletter, no.2, 2.  
 加藤碩一・遠藤祐二(2002):石の俗称 牛馬と石(その1). 地質ニュース, no.569, 57-64.

KATO Hirokazu (2005): Popular named stones/rocks in Tohoku District, Northeast Japan.

<受付:2004年12月9日>